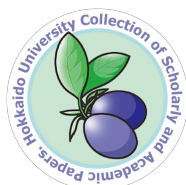




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	台湾における「言語・ジェンダー研究」：文献レビューを中心に
Author(s)	蘇, 席瑤; 林, 恒立
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 71, 205-228
Issue Date	2018-03-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68799
Type	departmental bulletin paper
File Information	MC71_09_Su_Lin.pdf



台湾における「言語・ジェンダー研究」ⁱ —文献レビューを中心に—

蘇 席 瑤 著ⁱⁱ
林 恒 立 訳

1 はじめに

国内外を問わず、言語学は歴史と伝統を有する研究分野の一つである。それに比べ、言語学の分枝とされ、社会言語学 (sociolinguistics) のサブ領域である「言語・ジェンダー研究」(language and gender studies)は、かなり立ち遅れている¹。1975年、アメリカの言語学者ロビン・レイコフ (Robin Lakoff) は当時のフェミニズムの思想を受け、*Language and Woman's Place* という著書を出版した。この本は瞬く間に広く世に知れ渡り、多くの人に読まれ、語られたとともに、多くの学者を惹きつけた。のちに「言語・ジェンダー研究」の重要な基礎文献となった。

この本が出版されて三十数年後の2012年現在、「言語・ジェンダー研究」は盛んな研究領域となってきた。しかし、台湾における言語とジェンダー (訳注：本稿では原則的に、中国語原文の「性別」を、男性・女性の性別を表す場合は同じ漢字の「性別」と訳し、学問・研究分野を表す場合は「ジェンダー」と訳す。なお、日本語でのニュアンスを考慮し、中国語原文の「性別差異」「両性差異」「両性」を、それぞれ「性差」「男女差」「男女」と訳す) に関わる現象をテーマにした論文は、欧米社会や日本での現象に基づいた論文に比べると、まだ数が少ない。また台湾では、基礎的なジェンダー研究の蓄積があり根ざしているのに対し、言語 (訳注：言語学的な視点) を切り口とした「言語・ジェンダー研究」の数はわずかであり、これは実に惜しいことである。そのため本稿には次の二つの目的がある。

- 一、海外の「言語・ジェンダー研究」におけるこれまでの研究の方向性と重要な論文を紹介し、それを全面的かつ体系的に押さえること。
- 二、台湾の言語とジェンダーに関わる現象をテーマにした先行研究をレビューし、海外の「言語・ジェンダー研究」の概況と比較する。これにより、台湾の現象が持ちうる研究データとしての価値を示唆するとともに、台湾研究においてまだ気づかれていない発展可能性や方向を示し、台湾の言語学者やジェンダー研究者の研究に資すること²。

2 「言語・ジェンダー研究」の流れ

1章で述べた通り、ロビン・レイコフによる *Language and Woman's Place* という著書は、「言語・ジェンダー研究」の重要な基礎文献である。この本が世に出るまでは、言語とジェンダー関連の研究がまったく存在していなかったわけではないものの、散在的であり、しかも現在の見方からすると、実証性に欠けているように思えるものがほとんどであった。例えば、オットー・イエスベルセン (Otto Jespersen 1922: 246) によれば、女性の使用語彙は男性に比べて少なく、女性は低俗な表現を避け、優雅で、あいまいでほかした、間接的な表現をより好んで使う。女性の言葉は言語の純潔さを保つのに対し、男性の言葉は力強く、想像力と創造力に富んでいる。もし（この世に）男性がいなかったら、言語はどれだけ無味乾燥なものになっていたのかということを彼は指摘している。しかしながら、この論は後世の学者から、実証性に欠けているだけでなく、男性の言葉にある種のノーマル・スタンダード（訳注：標準的、規範的なもの）や、男性の知恵を象徴するものと見なし、一方で女性の言葉は男性の言葉に比べてレベルが低い（と同時に、女性は男性に劣っている）ことを暗に示しているのではないかなど、多くの批判を受けた。

1973年、ロビン・レイコフが発表した *Language and Woman's Place* という論文は、*Language in Society* というジャーナルに掲載され、1975年、この論文は加筆され、同じ題名の専門書が出版された。この論文（書籍）の内容は、のちに支持者と反対者によってさまざまな論争を引き起こしたものの、「言語・ジェンダー研究」に盛んな発展をもたらしたことも、揺るぎない事実である。レイコフはこの本の中で、「女性語」(women's language) の存在を指摘している。レイコフの言う「女性語」というのは、女性独特の話し方を指し、時には女性ならどのように話すのかというステレオタイプも表している。次の例を見てみよう。

- 一、繊細な色彩用語を使用する。例えば“beige”（訳注：「ページュ」中国語原文：「灰棕色」）や、“aquamarine”（訳注：「アクアマリン」中国語原文：「水緑色」）、“lavender”（訳注：「ラベンダー」中国語原文：「薰衣草紫」）など。
- 二、「感情」（褒めや憧れなど）を表現する「『空っぽ』の形容詞」（“empty” adjectives）を使用する。例えば「なんということでしょう」（中国語原文：「太美妙了」）の意味に近い英語の形容詞、一般的に具体的な意味・機能を持たない“divine”, “adorable”, “charming” など。
- 三、語尾・文末イントネーションを上げる。叙述文の文末のイントネーションを上げることで、疑問文に類似した音声効果をもたらす。
- 四、疑問文を付け加える。叙述文の直後に疑問文を付け加えることで、上記の「語尾・文末イントネーションを上げる」のと同じように、叙述文の確定性・確実性を低下させる効果をもたらす。

- 五、より礼儀正しい表現の使用。乱暴な言葉遣いをせず、例えば“died”（訳注：「死んだ」中国語原文：「死」）の代わりに、“passed away”（訳注：「この世を去った」中国語原文：「去世」）などの表現を使用する。
- 六、ヘッジ（hedges）の使用。ヘッジは確定性・確実性を低下させる機能を持つ。例えば“sort of, kind of”（訳注：「ちょっと、…みたいな」中国語原文：「有點」）、“you know”（訳注：「ええと、あのう」）、“well”（訳注：「まあ」）など。
- 七、強意語（intensifier）の過剰使用。例えば“so”（訳注：「すごく」中国語原文：「太」）、“very”（訳注：「とても」中国語原文：「很」）など。
- 八、比較的大げさな口調。
- 九、標準的・規範的な英文法の過剰使用。

レイコフは、「女性語」は社会化におけるある種の産物であり、その特質は、口調の不確定性・不確実性を生み出し、話し方の力強さや行き過ぎた礼儀正しさを低減させることであると指摘している³。そのため女性は、次のような窮地に立たされている。すなわち、社会で期待されている「女性語」を使用しなければ女らしさが無いと思われるが、いったん「女性語」を使用してしまうと、自分の発言に影響力がなく、自信がないかのような印象を与えてしまう。また、レイコフは、上述の「女性語」の特徴は、地位が低い男性にも見られ、女性に限ることではないと考えている。したがって、「女性語」は実質的には「弱者語」である。

レイコフのこの著書は、「言語・ジェンダー研究」の扉を開き、これまでに関連する研究が大量に行なわれてきた。また、言語とジェンダーをテーマにした英語の教科書も出版されているため、本稿で万遍なくレビューするのは困難がある。そのため、以下、メアリー・ブコルツ（Mary Bucholtz）が2004年に新たに編集した *Language and Women's Place: Text and Commentaries* の序論で列挙された五つの問いに基づきながら、重要な文献とそれによって明らかになったことを簡単に述べる。

ブコルツ（2004）は *Language and Women's Place* を三十周年記念版として新たに編集し、原著をそのまま載せるだけでなく、原作者であるロビン・レイコフに注釈を付け加えてもらい、また、代表的な「言語・ジェンダー研究」の学者にも短いコメントを寄せてもらった。その序論で、ブコルツはこの本によって生み出された五つの重要な問いを次のようにまとめている。（訳注：以下の日本語訳は、中国語原文に準拠する。）

- 一、女性の言葉にはどのような特徴があるのか。一般的に社会では女性の言葉に対してどのようなイデオロギー（ここでいうイデオロギーは政治に対するイデオロギーではなく、女性の言葉に対する態度や見方を広義に指す）が存在しているのか。（What linguistics practices and ideologies are associated with women's speech?）
- 二、人々が「女性」について語る際に、ジェンダーに関するイデオロギー（性別に対するステレオタイプを含む）がどのように現れているのか。（How are gender ideologies

made manifest in the ways women are spoken for?)

- 三、こうした性別に関わる言語・社会の現象と、男女間の権力格差との間にどのような関連性があるのか。(What is the role of gender-based power inequality in these sociolinguistics processes?)
- 四、こうした性別に関わる言語・社会の現象と、さまざまな文化的メカニズム（核家族内での社会化と異性愛への社会化のプロセスや、メディアにおける表現、その他の巨視的な社会構造を含む）との間にどのような関連性があるのか。(What is the role of cultural institutions, including socialization in the nuclear family and into heterosexuality, representations in the media, and other large-scale social structures?)
- 五、言語を基盤にした文化的システム（ポライトネスなど）は、どのようにしてジェンダーの不平等性を再生産しているのか。(How do linguistically based cultural systems, such as politeness, reproduce unequal gendered arrangements?)

以下、逐一見ていこう。

2.1 女性語の特徴とそれに関わる言語態度

「言語・ジェンダー研究」の最も基本的な問いの一つとして、果たして性別が異なれば言語行為も異なるのか、男女の間では類似点が多いのか、それとも相違点が多いのか、というものである。この問いはさらに音声、形態、文法、談話ストラテジーなど、さまざまな切り口から捉えることができる。言語変異研究 (language variation studies) を行なう多くの社会言語学者たちが指摘したように、多くの社会では、同じ経済的・社会的地位の男性に比べると、女性はより多くの標準的な発音や規範的な文法を使用する。この現象については、言語変異の古典的研究であるラボフ (Labov 1972)、トラッドギル (Trudgill 1974)、マコーリー (Macaulay 1978)、ニューブルック (Newbrook 1982) およびアイシコビッツ (Eisikovits 1987) などのいずれの研究においても言及されている。また、ミルロイ (Milroy 1980)、チェシャー (Cheshire 1982) およびエッカート (Eckert 2000) も、ジェンダーと言語使用 (音声、形態、文法面) との関連を指摘しているが、経済的・社会的地位による分類は最も非理想的であると考えている。すなわち、同じ経済的・社会的地位の人間でも、置かれたソーシャル・ネットワークが異なれば、その言語行為も異なってくる。また、男性と女性とではソーシャル・ネットワークへの参加や友達作りのパターンに違いが見られ、社会的地位が異なる人の間でもそれが異なってくる。そのため、ソーシャル・ネットワークこそ、違いをもたらすより根本的な原因である可能性がある。音声、形態、文法に見られる男女差の他、言語変異研究が「言語・ジェンダー研究」に与えたもう一つ重要な貢献として、言語の変化にジェンダーが与えた影響に関する指摘が挙げられる。上述のラボフ (アメリカでのデータ)、トラッドギル (イギリスでのデータ)、ミルロイ (アイルランドでのデータ)、およびオーストリアのオーバーヴァルト (Oberwart)

という小さな町でのデータを扱ったガル (Gal 1978) などの古典的研究においても、女性は標準的な発音や規範的な文法をより多く使用するが、言語の変化に関して言えば、常にリードし、先駆的な役割を果たしていると指摘している。

音声、形態、文法の他、談話分析の研究者も実証的研究を通して、レイコフ (1975) が言及したヘッジ (hedges) および付加疑問文 (tag questions) は、必ずしも女性が多用するとは限らないこと、また、必ずしも不確定・不確実な言い方や自信のない表現を使用するとは限らないことを明らかにしている。ホームズ (Holmes 1984, 1987) は、ヘッジと付加疑問文をさらにそれぞれの機能に基づいて分類している。ホームズ (1987) は、ヘッジ (例えば “you know”) は、イントネーションの異なりによって、ある時は話し手の自信や確信を表し、ある時は話し手の不確信を表すという。しかし性差を考慮すると、女性の使用する “you know” は確信を表し、一方、男性の使用する “you know” は不確信を表し、また、その差は、統計的に有意であったと指摘する。一方、ホームズ (1984) は、付加疑問文には疑問・不確かな気持ちを表すもの、相手に話に加わってもらうためのもの、もしくは批判をする際に言い方を和らげるためのものがあるとしている。男性が使用する場合は多くは、疑問・不確かな気持ちを表すためであるのに対し、女性が使用する場合は多くは、相手に話に加わってもらうためである。すなわち、ヘッジと付加疑問文の使用に見られる男女差は、量的な違いにあるのではなく、使い方の違いにあるのである。

言語使用の男女差に注目したマルツとボーカー (Maltz and Borker 1982) およびその後のタネン (Tannen 1991) は、男女間での談話スタイルには多くの違いがあるため、誤解が生じやすく、その男女差の起源は、幼児期に同性の友達との間で築いた談話スタイルであるとしている。この考えは文化差異論 (difference theory) と呼ばれている。また、この他、同性の友達とのインタラクションにおいて、女性はより協力的な方法を用いる傾向があるのに対し、男性はより競争的な方法を用いる傾向があるという研究もある。このスタイルの違いは、話題や、話題の変え方、話し手に対する返事 (「うん」や頷きなどの意思表示)、ヘッジの使用、質問の使用、命令あるいは依頼の口調などから観察できる (Goodwin 1980, 1990; Tannen 1990, 1994; Coates 1996, 2004)。しかし、キャメロン (Cameron 1998) が研究者たちに強く呼びかけたように、協力と競争は表裏一体である。研究を行う際に、男性語ならきっとより競争的で、女性語ならきっとより協力的であるという先入観に当てはめて判断するのを避けなければならない。キャメロンは、男女はお互いの文化を分かり合えない二つのグループであるという考え方をせず、その代わりに、一般社会では男女に対する見方がある程度理解されているために、人々は場面ごとに異なる性別役割を採用しているのである主張する。この考えはポストモダン理論 (post-modern theory) またはパフォーマンス理論 (performance theory) と呼ばれている。

以上見てきた文献のほとんどが欧米圏でのデータを使用したものである。アジアの国々では、日本における言語と性差の研究も長年行なわれ、1980年代から、さまざまな研究において

「女性語」と「男性語」の特徴について議論されてきた（例えば、Ide 1979; Ide and McGloin 1990; Shibamoto 1985; レイノルズ秋葉 1993）。これらの研究は、日本人男性と日本人女性は一人称、敬語、文末の終助詞、語彙の選択、イントネーションの上昇・下降やトーンの高低などにおいて、明らかな違いがあると共通して指摘している。

しかし、1990年代以降、上述の「男性語」と「女性語」の違いが、日本人男女の実際の言語使用のあり方を反映しているわけではないと強調する研究も徐々に現れた。なぜなら、過去の研究におけるデータの多くはいわゆる標準的な日本語を使用しているのであって、同性間における違いや異なる場面で生じるさまざまな変化を重視していなかったからである。これらをふまえた上で、近年の研究は異なるグループ（例えば、労働者、キャリアウーマンなど）を研究対象にし、異なる社会的状況で同性間においても見られる言語使用の違いを観察するようになった。オカモトとシバモト・スミス（Okamoto and Shibamoto Smith 2004）が編著した *Japanese Language, Gender, and Ideology* という本が特に顕著である。こうした研究方向のシフトチェンジは、前述のパフォーマンス理論の登場と密接な関係がある。

2.2 ジェンダーに対するステレオタイプとその機能

女性の言語行為に関するステレオタイプは少なくなく、さまざまな社会で広く言い伝えられている。欧米社会では、“nagging”（ガミガミうるさい）や“bitching”（毒舌／減らず口）であることと女性はよく関連づけられる。同じような行為を男性が行なっても、女性と同じような評価はされない（Talbot 2005）。ところが、女性が「おしゃべり」だと思われているのは、男の人より口数が多いからではなく（実際には、男性のほうが女性より口数が多いという実証的研究での結果もある）、完璧な女性としてのイメージは静かで無言であることだからである（Spender 1980）。エックアート（Eckert 2004）も、レイコフ（1975）で言及された「女性語」をあやつる女性は、すべての女性を指しているのではなく、社会が認知している「完璧な女性」というステレオタイプであると指摘している。ステレオタイプは、通常、現実と違って、簡略化された分類であり、こうした簡略化された分類の表象は、文化ヘゲモニーと分離できない密接な関係がある。ステレオタイプもまた、ある種の社会的コントロールと見なすことができる。しかしこうしたコントロールは強制的なものというわけではなく、大衆の合意のもとで行なわれているものである（Talbot 2005）。

レイコフ（1975）で言及された「女性語」の特徴は、その二十年後のアメリカ社会においても依然として「理想の女性」としてのステレオタイプのままである。ホール（Hall 1995）は、利用者に電話を通して性的な幻想を与えるテレフォンセックスサービスの従業員にインタビューを行なった。インタビューは電話で女性のふりをする男性まで含まれていることから、その仕事内容は利用者の好みに合わせた言語パフォーマンスであって、女性が本来どのように話しているのかを表現することではないということが分かる。インタビューによれば、利用

者が好む女性的な言葉には、緻密な色彩用語や、高めの声のトーン、ささやきなどを含む。ホールの論文は、インタビューのデータとレイコフによる「女性語」との関連を指摘しただけでなく、「性別」の持つパフォーマンスの性質（すなわち、前述のパフォーマンス理論）を示唆している。

2.3 男女間の権力の格差と、ジェンダーに関わる言語現象との関係

「言語・ジェンダー研究」の学者が早期から取り組んでいた目標の一つに、性差別の意味合いを含む言葉（sexist language）を可視化することがある。1970から1980年代にかけて、レイコフ（1975）およびスペンダー（1980）などの古典的研究の影響のもとで、性差別を表す言葉に関する議論が日に日に増え、現代社会での英語の使われ方に具体的に影響を与えた。こうした男女間の不平等を表す言葉には、男性を指す代名詞を男女共通の代名詞（generic pronoun）として使う用法、男女によって肩書のつけ方も異なってくるという現象、“bitch”や“ho”など女性を軽蔑する言葉などが含まれる。

今日、言葉の改善によりこうした現象は稀になったと一般的に認知されているため、上述の議論は英語圏の国々の学問領域では徐々に触れられなくなってきた。しかし、ミルズ（Mills 2008）が強く訴えたように、言葉自体（語彙）を中心とした明白な性差別（overt sexism）は減少してきたものの、言葉を通して表現される男女の不平等は依然として明白でない形で談話（discourse）の中に存在している。そのためミルズは、性差別の言葉（sexist language）に関する議論は言葉の次元を超えて議論されるべきであると主張している。そのためには、談話・ディスコースの観点を考慮に入れるとともに、より完全な理論のフレームを用いること、そしてそれと同時に性差別の言葉の背後にある社会・文化的メカニズムや要因というより巨視的な観点から眺め、個別のインタラクションに見られる性別に関する現象を微視的に議論すべきであるとミルズは言う。

男女間の権力の格差・不平等もまた、男女間の日常会話で具現化されている。例えば会話中、相手の話を遮って話題を変える頻度に違いがあること、話が長く発話権を相手に譲らないこと、あるいは相手の発話に対して反応を示さないこと、反応が遅いことなどが挙げられる。このように会話の中で一方が優位に立っているという特徴が性別に関わっているか否かは、多くの研究が議論している問題である。ジンマーマンとウェスト（Zimmerman and West 1975）は、アメリカで二者間の会話データを数十組分集めた。同性間の会話は20組分、男女間（男性一人、女性一人のペア）は11組分である。その結果、20の同性間の会話において、相手の話を遮った例はわずか7例であった。一方、11の男女間の会話において、相手の話を遮った例は48例にも達し、そのうち男性が女性の話を遮った例は46例で、一方、女性が男性の話を遮った例はわずか2例であった。また、ウェスト（1998）は医師と患者との会話データで相手の話を遮る現象を観察した。一般的には、上位の立場の人が下位の立場の人の話を遮る頻度が高く、医療

関係となると、医師は上位の立場であるため患者の話を遮る回数も多く、特に医師が男性の場合、患者の話を遮る回数は、患者が医師の話を遮る回数の二倍以上であった。しかし、医師が女性で、患者が男性の場合、患者が医師の話を遮る回数が、医師が患者の話を遮る回数よりも多かった。こうした現象は職場における女性の上司と男性の部下との会話でも起きる。ウッズ (Woods 1989) は二つの職場における、上司一名と部下二名 (男女それぞれ一名) の三者間の会話データを比較した。この二つのデータの違いは、一つのデータの中の上司は男性で、もう一つのデータの中の上司は女性であるという点である。その結果、上司が男性の場合、三人の発話量を比較すると、上司が最も多かった。一方、上司が女性の場合、三人の発話量を比較すると、男性の部下が最も多かった。デフランシスコ (DeFrancisco 1998) は私的領域における七組の夫婦間の日常会話を観察したところ、男性が女性の言うことに対して反応を示さない、あるいは反応が遅い頻度は、女性よりも高かった。以上を総合して、公的領域または私的領域を問わず、男女間の会話において、男性が優位に立っていることが明らかになった。

2.4 家庭教育・学校教育と、ジェンダーに関わる言語現象との関係

前述のブコルツによる五つの問いのうちの四つ目は、さまざまな文化的メカニズムと、性別そして言語との関係についてであった。しかし、文化的メカニズムの範囲が広いため、本節では、先行研究における家庭と学校教育における社会化の部分のみ紹介する (異性愛への社会化のプロセスを含む)。メディアにおけるジェンダーの構築に関しては、メディア研究の分野ではすでに多く言及されているため、ここでは割愛する。

男児と女児は思春期に入る前まで、声帯の構造に違いはないものの、多くの研究によれば (例えばエドワード (Edwards 1979); リー、ヒューレット、ナイアン (Lee, Hewlett, and Nairn 1995); サックス、リーバーマン、エリクソン (Sachs, Lieberman, and Erickson 1973) など)、成人が声のみを手がかりに男児か女児かを識別する成功率は七割以上であるということから、男児と女児は幼少期からすでに男女の言葉遣いの違いを区別し、それに合わせて発話を調整しているという示唆が得られた。声に注目した研究によると、子どもは唇の形や発音の仕方を変えることによって、声をより男性っぽくあるいは女性っぽく聞こえるようにしている (Coates 2004; Sachs et al. 1973)。女児も、2.1節で言及した女性のステレオタイプと同じように、男児に比べてより標準的で規範的な発音と文法を使用する傾向があり、しかもこの傾向は年齢が上になればなるほど顕著である (Romaine 1984; Eisikovits 1998)。談話スタイルに注目した研究によれば、男児は幼児期から、前節 (訳注: 2.3節) で触れたように、会話で優位に立つようにしている。男児と女児の会話の中では、男児は女児に比べると合計の発話時間が長く、発話の回数もより頻繁である (Haas 1978, 1979; Swann 1998)。こうした談話スタイルは家庭においても学校においても観察される。エリクソン (Erickson 1990) とオックス、テイラー (Ochs and Taylor 1995) は、2組のアメリカ家庭における夕食での会話データを観察した。その結果、

よく話題を作るのは母親であるが、すぐに発話権を父親や息子に渡し、父親がその日についてのコメントをし、母親と娘は聞き手の役割を果たすことが明らかとなった。こうした夕食での会話は、伝統的な性別の役割を再生産し、子どもたちもこうした家庭での会話から、男の子は強く、女の子は弱い立場にあるという性役割を学習する。

欧米圏での多くの研究も、学校では、女兒よりも男児のほうが多くの注目を浴びているということを示唆している。男児は強い話し方を通して、授業でも優位に立つ。教師は無意識のうちに男児により多くの質問をし、より長めの発話時間を与え、また、男児が他人の発話を遮ることを許容してしまう (Kelly 1988; Spender 1988; Swann 1992; Swann and Graddol 1998)。

思春期に入ると、仲間の圧力や異性愛市場 (heterosexual market) (Thorne 1993) の形成などが、中学生の言語行為にある程度の影響を与える。異性からの注目を集めるように、または校内のクラスメートに認められるように、男子学生も女子学生も、言葉遣いやその他の行動を社会から期待される形に修正しなければ、仲間外れにされやすい。例えばアメリカの中学校の行事の多くは、異性愛の価値観に満ち溢れている。顕著な例として、名門チームの選手とチアリーダー (チアガール) の主従関係や、プロムパーティーで選ばれたプロムキングとプロムクイーン (Prom King and Queen) などがある。子どもから青少年に変わる過程の中においても、言語行為における変化が多く見受けられる。例えば女兒に見られる、幼児期の体を動かす遊びから、思春期に入って「座って男の子について語る」という行為までの変化も、社会化のプロセスの一部として見なすことができる (Eckert 2000; Eckert and McConnell-Ginet 2003)。

2.5 ポライトネスとジェンダー

ブラウンとレビンソン (Brown and Levinson 1987) によるポライトネス理論 (politeness theory) が「言語・ジェンダー研究」に与えた影響は少なくない。ブラウンとレビンソンの言う「ポライトネス」とは、単に一般的な礼儀 (例えば「請」「謝謝」「對不起」(訳注:「どうぞ」「ありがとう (ございます)」「すみません／ごめんなさい」) の使用など) だけではなく、より広くさまざまなものを含む。人々は、他人に好かれたいというポジティブ・フェイス (positive face) と、他人にじゃまされたり圧力をかけられたりすることを望まないというネガティブ・フェイス (negative face) の二つの特質を持ち合わせていると彼らは考える。そのため、彼らはポライトネスを二種類に分類した。一つはポジティブ・ポライトネス (positive politeness) という相手への憧れを表す言語行為であり、もう一つはネガティブ・ポライトネス (negative politeness) という相手にストレスや不快な感覚を与えない言語行為である。この二種類のポライトネスは、さまざまな言語形式を通して表現することができる。前述の「どうぞ」「ありがとう (ございます)」「すみません／ごめんなさい」はいずれもネガティブ・ポライトネスの一種であり、一方「褒め」はポジティブ・ポライトネスとして見なすことができる。

ブラウン (1998) は、さらにメキシコのマヤのコミュニティにおけるポライトネスの現象を

研究し、マヤ語族の言葉（訳注：ツェルタル語）において語気を強める、または語気を弱める表現を観察した。すると、女性が女性に対して、女性が男性に対して、そして男性が女性に対して話す時のポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスの使用合計数にはそれほど違いが見られなかった。しかし、男性が男性に対して話す場合のみ、ポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスを問わず、いずれも使用合計数が比較的少ないということが明らかになった。このことから、ポライトネスについて議論する際には、話し手の性別のみならず、相手の性別や二人の関係性への注目も重要であり、言語と性別の構築は、実にダイナミックなプロセスであるということが分かる。ホームズ（Holmes 1988）は、ニュージーランドの会話データに観察される「褒め」の現象を分析したところ、半数以上の例は女性が女性を褒める例であり、男性が男性を褒める例は最も少なくわずか9%のみを占め、男性が女性を褒める例と女性が男性を褒める例はそれぞれ23.1%と16.5%を占めている。「褒め」はポジティブ・ポライトネスの具現化ではあるものの、不適切な（的外れな）褒め方は相手に不快な思いをさせてしまう可能性があり、かえってネガティブ・ポライトネスの原則に違反してしまう。そのため、「褒め」は実に複雑な言語行為である。

それに加えて、「依頼」もネガティブ・ポライトネスの一種として見なすことができる。グッドウィン（Goodwin 1980, 1990, 1998）は男児と女児が遊んでいるときの依頼を比較し、その結果、男児は命令的な言い方をする傾向があり（例えば「その槌ちょうだい」、「その槌ほしから」）（中国語原文：「給我那個槌子，我要那個槌子」）、一方女児は「一緒に缶を探そう」（中国語原文：「我們一起來找罐子吧」）など穏和な言い方をする。エンゲル（Engle）も、父親が子どもと遊ぶ場合、命令文を使用する傾向があり（例えば「積み木遊びに来い」）（中国語原文：「來玩積木」）、一方母親は穏和な言い方をする傾向がある（例えば「積み木、遊びたい？」）（中国語原文：「你想玩積木嗎？」）と指摘する。ウェスト（West 1998）によると、女性医師によるアドバイスの口調は穏和であり、患者が言うことを聞く確率が高い。それに対して、男性医師によるアドバイスの口調は命令的で、比較的権威があるように聞こえるにもかかわらず、患者が言うことを聞く確率が下がる。そのため、命令的な口調が権力の象徴であるかどうかについては、議論する余地がある。

2.6 本章のまとめ

2章では、重要文献において明らかとされたことを、五つの問い（訳注：ブコルツ2004が提示した五つの問い）に基づいて紹介した。時系列で見ると、「言語・ジェンダー研究」は「性別」を一個人の固定した特徴ではなく、ある種のダイナミックなプロセスとして捉える傾向に徐々に発展してきた。性差の解釈を試みる理論で見ると、初期段階の先行研究（イエスペルセン（Jespersen 1922））では女性の言葉を男性の言葉に劣っている変体と見なし、この見方は「欠損理論」（deficit theory、中国語原文：「次等理論」）と呼ばれている。その後、「支配理論」

(dominance theory、中国語原文：「優勢理論」) および「差異理論」(difference theory、中国語原文：「差異理論」) が現れ、前者は、性別による差異は男性が社会において権力の優勢を持っていることに由来していると考え、後者は、性別による差異は男女の文化的差異によるものだと考える。近年の研究は、ますますジェンダーの構築プロセスを重視するようになっている。異なる場面において、個人個人が自分の性別を表現する方法も異なる可能性があり、決して恒常的で変わらぬものではない。このような見方もまた、ますます性別をある種のパフォーマンスであると見なすものであり(すなわち、前述の「パフォーマンス理論」)、分析の際にはより会話データの細部に注目し、性別の役割は常にその場その場でディスコースの中において次第に構築され、浮かび上がるものであると考える。

3 台湾の現象をテーマにした「言語・ジェンダー研究」のレビュー

台湾社会における言語とジェンダーに関わる現象をテーマにした研究は、大きく二種類に分けることができる⁴。一つは男女間の言語使用の相違(もしくは言語態度の相違)に関する議論である。もう一つは、人々はどのように男性または女性について語っているのか、男性または女性について語る際に、社会で期待される言葉遣いに対する認識がどのように現れているのか、である。(訳注：以下、原文を尊重するため、地名、人名、語彙、例文などすべて繁体字表記を使用する。)

3.1 台湾における男女の言語差

初期段階に行なわれた、男女の言語差に関する一連の研究には、李壬癸(Li 1980, 1982, 1983)が行なったタイヤル語のMayrinax方言およびPa?kual?i方言(それぞれ、苗栗県^{びょうりつけん}泰安郷錦水村汶水^{たいあんきょうきんすいじんぶんすい}および苗栗県泰安郷八卦村^{はつけせん})に関する先行研究が挙げられる。李が指摘したように、この二つのタイヤル語の言葉にはある特殊な現象が観察される。男性の使用する語彙形式と女性の使用する語彙形式には体系的な違いがあり、例えば「火」を表す言葉の場合、女性は「hapuy」を使用し、男性は「hapuniq」を使用する。また、李はさらに、女性の使用する語彙形式はより古代のタイヤル語に近いのに対し、男性の使用する語彙形式には新しい変化が見られると指摘している。李壬癸(1983)では、(1)異なる言語または方言の融合、(2)話し言葉におけるタブー、(3)社会態度、(4)秘密の言語、という男女の言語差の起源に関する四つの学説をレビューしている。これらのうち「秘密の言語」という説によってタイヤル語汶水方言に見られる男女差の体系性を解釈することができるが、解釈困難な部分もあるため、他の学説による裏づけが必要であると論じている。

李によるタイヤル語における男女の言語差に関する一連の研究は、世界の言語で稀に見るある種の現象を提示している。すなわち、男性の言葉と女性の言葉は体系的にも構造的にも明ら

かな違いがあり、その違いは、「男性方言」「女性方言」と呼んでも過言ではないということである。この男女の方言差もまた言語の変化と密接な関係があるが、これは2.1節で述べた欧米圏での言語変異研究が示す、「言語の変化において、女性は常にリードし、先駆的な役割を果たしている」という研究結果とは異なっており、李の研究によれば、タイヤル語における女性の言葉はより保守的で変わらぬものである。

ところが、多くの「言語・ジェンダー研究」では、男女の言語差のほとんどが頻度の問題として、すなわち相対的な違いとして扱われ、体系的・構造的な問題として、すなわち絶対的な違いとして扱われない。例えば郭賽華が1990年代および2000年代に行なった一連の研究では、台湾人女性（および台湾人男性）による私的領域でのプライベートな会話と、公的領域・公的場面であるテレビ放送やインタビューにおける談話スタイルとの違いについて議論されている。郭賽華（Kuo 1993a, 1993b）のデータの一部は、台湾人女性の友達同士での会話であり、その談話スタイルには次のような特徴が顕著に見られる。例えば相手が話している時に自分も同時に話したり、互いの話を遮ったり、早口だったり、立場の対立を表す慣用表現を使用して相手の考えに不賛成の意を表したりするなどがある。つまり、台湾人女性の友達同士の談話スタイルは、東アジアの文化で言われる礼儀正しく、穏やかなイメージやステレオタイプとはかけ離れている。しかしこうした談話スタイルは、表面的には静いに見えても、絆を深める方法の一つとなっている。また、郭賽華（Kuo 1996）は、男性同士、女性同士、男女ペアという三種類の会話を比較し、その結果、台湾人男性と台湾人女性がジョークを言う／言われたジョークに反応する際に、および相手にアドバイスをする際に、明らかな頻度の違いがあることを示した。男性はジョークを言う頻度が高いのに対し、女性は笑い声でそのジョークに返事をする頻度が高いという、男女の会話における役割分担が観察された。また、女性の友人同士の場合、相手にアドバイスをする頻度は、男性の友人同士に比べて高かった。さらに、郭賽華（Kuo 1999）は、若年層の女性の会話内で、女性であることの悩みについて語られた部分を観察し、こうした話題は、聞き手からの強い共感を得られると指摘している。会話形式に注目し細かく分析すると、相手に同意を示すさまざまな会話の特徴が見られる。なお、このような話し言葉における現象は、台湾人女性が1990年代からさまざまな面において、一昔前の女性と比べてより男女平等に権利を受けるようになったものの、若年層の女性はそれでもなおさまざまな不安を抱えているという社会的要因に帰属すると思われる。

郭賽華（Kuo 2003, 2008）は方向を変え、公的領域における言語と性差の関連を議論するようになった。郭（Kuo 2003）は、合計24時間のスポーツ中継を観察し、生中継中の台湾人男性アナウンサーと台湾人女性アナウンサーによる「你」（訳注：二人称主語）の使用を比較している。郭（Kuo 2003）は「你」の語用論的機能を、ある特定の対象を指し示す「你」と、非特定の対象を指し示す「你」と、語気を強めて誇張的な効果をもたらす「你」という三種類に分類しデータを分析した結果、男性アナウンサーが使用する「你」はよりバリエーションに

富み、女性アナウンサーが使用する「你」は非特定の対象を指し示す「你」であるという傾向が見られると分析している。郭（Kuo 2003）によれば上記の現象は、公的領域における台湾人男性はよりフォーマルで、感情が込められておらず無味乾燥な言葉遣いをするという一般的な認識とは異なる。考えられる解釈の一つとして、スポーツ中継の視聴者の多くは男性であることから、男性アナウンサーは生中継の際に、ある種の疑似的な私的領域を作り出し、男性視聴者と友達であるかのように会話するための雰囲気を作ろうと試みる（男性視聴者と友達になって会話しているかのような雰囲気を作ろうと試みている）。そのため、インフォーマルで大きな口調を用いた疑似会話の中継スタイルをとっている。一方、女性アナウンサーも、視聴者の多くは男性であることから、逆に感情を込めない中継スタイルをとっている。郭（Kuo 2003）の研究結果には、前述のパフォーマンス理論との関連性が窺える。このことから、言語と性差の関係は、固定的で変わらぬものでは決してなく、場面と対象によって決まってくるのである。なお、郭（Kuo 2008）は元副総統・呂秀蓮氏のテレビ番組でのインタビューをデータに、その談話スタイルを分析している。呂氏の談話スタイルは率直であり、権威的であると同時に権威に挑戦するという印象が感じられる。例えば、インタビュアーの話を遮って、あらかじめ答えを用意していた質問で反問するなどのような特徴がよく見られる。世論における呂氏へのマイナス評価は、実は女性政治家であることに起因しており、談話スタイルが「淑女のように」だと、やさしすぎて迫力がないと思われ、一方、率直で権威的な談話スタイルだと、女性らしさに欠けていると思われる。呂氏の率直で挑戦的な談話スタイルは、政治的リーダーシップをもたらしてくれるが、マイナス評価を招くきっかけにもなっていると郭（Kuo 2008）は分析している。

キャサリン・フェリス（Catherine Farris 1991, 2000）は、「言語・ジェンダー研究」を幼児発達の研究と関連づけ、台湾の幼稚園の男児と女児を対象に、園児たちはどのように自分自身の性別を知るようになるのか、このような認知と性別の社会化のプロセスはまたどのように言葉を通して現れているのかを議論している。フェリス（1991）は、同性間の幼児のインタラクションを分析した結果、3歳から8歳までの幼児には、かなりの程度の性差が現れていることを明らかにした。男児同士の場合、競い合いを行ない、言葉遣いも行動もより侵略性・加害性を有し、さまざまなオノマトペを使って周囲の音・声を真似し、話し方もより荒っぽく、大声である。これに対し、女児同士の場合、疑似家庭的な役割関係を強調し、話し方はあいまいで、時には甘えたり、情動を表す言葉遣いや行動をとったりする。また、フェリス（2000）は5、6歳の台湾人園児を対象に、男児のグループと女児のグループが摩擦を起こしている時に、子どもたちはどのように反応し、性別の境界線を引いているのか（例えば、「男の子はあっち、女の子はこっち、来ないで」中国語原文：「男生在那邊女生在這邊，不准你們過來」）を観察している。このようにフェリスは幼児のグループのインタラクションを通して、性差・男女差は幼児期にすでに存在していると指摘している。幼児はただ単に性差・男女差をありのまま表現

しているだけではなく、男児も女児も能動的に性役割の構築に参加している。多くの場合、性別の社会化もしくは性別に対する感覚と認知は、幼児による同性間での遊びや異性間グループでの軋みなどという毎度の経験から構築され、複製（訳注：再生産）および強化されているのである。

日進月歩する科学技術は、「言語・ジェンダー研究」にも新たな研究の場を与えてくれた。江文瑜・蔡佩舒（Chang and Tsai 2007）はBBSのネット用語をデータに、談話における話し手と聞き手の性別や話題は、果たして下記の四種類の談話ストラテジーに影響を与えるのかどうかを議論している。その四種類は、(1) 文末助詞（「吧」（訳注：「だろう」）など）の使用、(2) 強意語（「真」、「超」（訳注：「マジ〜」「超〜」）など）の使用、(3) コード・スイッチング（例えば中国語から英語に切り替える場面）、(4) 顔文字（「^^」など）の使用、である。集計結果によれば、相手の性別が同性か異性かによって、文末助詞、強意語、そして気まずさを表す顔文字の使用も異なってくる。話題（情報交換か、気持ちを綴るためか）によっても、嬉しさを表す顔文字の使用が異なってくる。江・蔡もまた本稿前掲のジェンダーに関連する三つの理論——支配理論、差異理論、パフォーマンス理論——について議論し、それら三つが、データの中の一部の現象の裏づけとなっていることを論じている。

以上で紹介した文献は、既公刊のジャーナルまたは専門書のみである。その他にも、性差をテーマにした修士学位論文も少なくない。以下、かいつまんで紹介する。視聴者参加型番組（call-in）に見られる談話の男女差に関する議論・分析（陳淑美1996）、男子大学生と女子大学生の断り表現の使用の研究（林瓊瑤1998）、高校生の会話スタイルに見られる性差に関する議論・分析（李怡慧2004）、台湾のテレビトーク番組における談話スタイルの男女差に関する議論・分析（劉靜孺1996）、日常会話に見られるジェンダーの考察（謝伊琪2006）、中国語（台湾）と台湾閩南語のコード・スイッチングと性差に関する議論・分析（紀卓呈2008）、ブログでの言語使用に見られる性差の考察（彭威鈴2008）、コンピューターを介した三種類のコミュニケーション（訳注：computer-mediated communication, CMC）（訳注：ブログ、BBS、インスタントメッセージ）に見られる言語使用の性差の考察（歐陽君怡2010）、携帯電話のショートメッセージに見られる性差の考察（鄭雯璇2011）などがある。

3.2 台湾では男女はどのように語られているのか

人々が男性に対する見方や語り方と、人々が女性に対する見方や語り方はいかに異なっているのかということも、「言語・ジェンダー研究」の重要なテーマである。台湾における研究（中国語原文：本土研究）の中で、海外の「言語・ジェンダー研究」ではあまり見られないタイプの研究の一例として、中文の言語（文字）の表記体系に込められた、異なる性別への期待がある。文字の構造（例えば「女」偏の漢字や、「女」と「帚」（訳注：ほうき）を組み合わせれば「婦」となり、女性の仕事は家事であることを表す）をはじめ、語彙や語順（男性が先、女性が後）、

名づけ方（男の子の名前には出世をすることや祖先の名を上げることなどの意を込め、女の子の名前は容姿端麗やおとなしさなどの意を重視する）、古典に由来する慣用語に見られる男女に対する描写・形容（「最毒婦人心」（訳注：女の心はマムシとスズメバチに勝る）、「唯女子與小人為難養也」（訳注：「唯だ女子と小人とは養い難しと為す」）など）まで、中国語で男女差がどのように扱われているのかに関する研究がある⁵。フェリス（1988）は、中国語における「隠れた」性別について議論している。インド・ヨーロッパ語族の言語と異なり、中国語には「文法における性」（grammatical gender）（訳注：男性名詞や女性名詞、中性名詞）の区別はなく、代名詞の使用に関しても性別によって変わらないものの、中国語には性別をマークする方法がないというわけではないとしている⁶。フェリスは、台湾で使用されている中国語でのさまざまな語彙、具体的には、一般的な呼称、家族・親族呼称、人の一生における特定の時期を示す語彙（例えば「青年」「壯年」「嬰兒」（訳注：「赤ちゃん」）、「婦女」（訳注：「婦人」）など）、職業名・職種名、男性と女性のマイナス評価語彙（例えば「潑婦」（訳注：「あばずれ」）、「色狼」（訳注：「痴漢」）など）、語順、名づけ方、および性別に関連する動詞（例えば「善妒」（訳注：「やきもちをやく、嫉妬深い」）、「撒嬌」（訳注：「甘える」など）について考察した。そして、中国語には、「文法における性」の区別はないものの、語彙面において、性別を表す標識（訳注：マーカー）が隠れていると結論づける。こうした性別を表す標識は、文法自体から生じるものではなく、社会的・文化的価値から生じるのである。男性は中国語で依然として女性よりも優位な立場にある。中国語の言語構造と言語使用から男女に対する見方の違い（不平等）を議論する近年の研究には、ファン（Fan 1996）とエットナー（Ettner 2002）なども挙げられるが、考察対象が中国大陆を中心としているため、ここでは割愛する。

廖招治・施玉惠（Laio and Lii-Shih 1993）は台湾人大学生を対象に、言語が混ざる現象（中国語のみ、中国語に台湾語、中国語に日本語、英語）および話者の性別に対する言語態度の実験を行なった。実験協力者（大学生）に録音を聞かせ、録音の中の話者への印象（性格や能力について）評価してもらった。録音の中に合計四名（男性二名、女性二名）の話者がいて、発話にいくつかの言語が混ざっている。その結果、中国語に台湾語が混ざる話者のほうが、フレンドリーで親近感があると評価されやすく、中国語に英語が混ざる話者や、中国語のみの話者は権威があると評価されやすかった。また、中国語に英語が混ざる話者や、中国語に台湾語が混ざる話者はユーモアの感覚があると評価されやすかった。そして、男性話者よりも女性話者のほうがフレンドリーで、魅力的、勤勉、素直、信用できると評価されやすく、男性話者の場合、ユーモアの感覚があり、でしゃばりであると評価されやすかった。このことから、台湾社会では男性と女性に対して、やはりある程度のステレオタイプが存在していると見て取れる。

魏美瑤（Wei 1999, 2001）は、選挙戦におけるキャッチコピーのメタファーの使用に注目し、性別に関わるメタファーが、異なる性別の立候補者にもたらす効果について議論している。1996年の総統選挙では、四組の立候補者のうち、男性が七名で、女性が一名（王清峰）であった。

王氏のキャッチコピーでは、「母親」、「女兒」（訳注：「娘」）、「模範生」（訳注：「優等生」）、「正義女神」（訳注：「正義の女神」）などの女性に関わるメタファーが使用されており、女性が持ち合わせるサービス精神、寛容、服従、高い道德基準への到達などが強調されている。投票者に、他の候補者と異なる女性としてのイメージを深く与えることはできたものの、王氏の政治家としての迫力やリーダーシップといった、政治においてやはり問われる重要な人格のイメージが前面にアピールされなかった。魏美瑤（Wei 2001）はさらに1997年の県・市長の選挙において、三名の女性立候補者へのネガティブ・キャンペーンを考察した。女性立候補者は、男性立候補者に比べて、家庭や婚姻状況についてより大きく取り上げられやすく、攻撃される理由にもなる。このことから、女性を家庭と密接に結びつけるという台湾社会の傾向を垣間見ることができる。

政治においてライバルを攻撃するためのネガティブ・キャンペーンと同工異曲なのは、芸能人のマイナス報道である。王宏均（Wang 2009）は蘋果日報（訳注：「アップルデイリー」）での「木瓜霞吐槽」（訳注：「パパイヤ霞のツッコミタイム」）というコラムの文章をデータに、芸能人のゴシップに対して行なわれる皮肉めいた口調の批評に注目し、男性芸能人と女性芸能人がコラムの中でとりあげられた理由に、社会が期待する性別役割が含まれているかどうかを分析している。その結果、女性芸能人の多くは、嫉妬深く、争い合い、拝金主義であるという評価であり、独身であるかどうか、順風満帆に結婚できたかどうか、どのような婚姻状況にあるのかも評価のポイントの一つとなっている。それに対し男性芸能人の場合、外見や熱愛報道による売名行為などをめぐって批判が生じているということが明らかになった。

蘇席瑤（Su 2008）は、台湾でよく使用されている「氣質」（訳注：「品が良い」「上品だ」）という言葉を出発点として、その言葉と性別、言語態度との関わりについて議論している。台湾の大学生へのインタビューデータを用いて、「氣質／沒氣質」（訳注：「品が良い／品がない」）およびその類義語である「文雅」（訳注：「優雅だ、風雅だ」）、「高雅」（訳注：「気品が高い」）、「粗俗」（訳注：「低俗」）、「『sòng』（台湾語）、『俗氣』（中国語）の意」（訳注：「俗っぽい」）などの言葉が、インタビューデータ内のどのようなシチュエーションに現れているのか、また、他人の言葉遣いや言語行為について評価する際にこれらの言葉は用いられているのか否かを調査した。その結果、インタビューの中で、「沒氣質」は「髒話」（訳注：「汚い罵り言葉」）や、「臺灣國語」（訳注：「台湾語訛りの中国語」）、「臺語」（訳注：「台湾語」）などと結びつけられるということが明らかになった。また、「氣質」という言葉も、女性に使われることが多く、そのため、この言葉の中から、社会による性別への期待と言語態度の両者が同時に浮かび上がっているのである。理想の女性のイメージがいわゆる「氣質」を備えていなければならない場合、標準的・規範的女性語が使われ、台湾語の使用が減ってしまうという傾向になる。蘇（Su 2008）の研究は単に性別をめぐる現象を提示しただけでなく、性別と言語をめぐるアイデンティティの形成とその再生産のプロセスについての探索をも試みている。

3.3 本章のまとめ

2章の「言語・ジェンダー研究」の文献の全体的なレビューに比べて、台湾のデータを扱った「言語・ジェンダー研究」の数は少ないものの、その範囲は、2章で触れた五つの重要な問いをカバーしている。3.1節で挙げた台湾の先行研究は、2.1節の「女性語の特徴とそれに関わる言語態度」と照らし合わせることができ、3.2節で挙げた台湾の先行研究は、2.2節の「ジェンダーに対するステレオタイプとその機能」と照らし合わせるができる。また、3.1節と3.2節でレビューした先行研究は、それぞれ2.3節から2.5節までの三つの問いに関連している可能性が高い。そのうち施玉恵（1984）、郭賽華（Kuo 1993a, 1993b, 2003）、フェリス（Farris 2000）、江文瑜・蔡佩舒（Chiang and Tsai 2007）、蘇席瑤（Su 2008）はいずれも2.3節の問いである「男女間の権力の格差と、ジェンダーに関わる言語現象との関係」について議論している。フェリス（1991, 2000）は2.4節の問いである「家庭教育・学校教育と、ジェンダーに関わる言語現象との関係」について議論している。なお、施玉恵（1984）、郭賽華（Kuo 1993a, 1993b, 2003）、フェリス（Farris 2000）、江文瑜・蔡佩舒（Chiang and Tsai 2007）、蘇席瑤（Su 2008）もまた2.5節の問いである広義の「ポライトネス」をめぐる現象について言及している。

4 おわりに

本稿では、まず海外における「言語・ジェンダー研究」のこれまでの重要論文と研究方向を振り返り、この研究分野をより全面的かつ体系的に紹介した。本稿の後半以降の部分では、台湾の言語とジェンダーに関わる現象をテーマにした先行研究のレビューを行なった。海外の「言語・ジェンダー研究」の概況との比較を行ない、言語学者とジェンダー研究者の今後の研究の参考になるように、台湾での現象が持ち得る研究データとしての価値を示すとともに、今後の研究の方向性を示した。本稿でのレビューを通して次のことが分かった。台湾のデータ（会話データ・談話資料）を扱った「言語・ジェンダー研究」の数は決して多くなく、また先行研究のテーマは範囲がやや広いこと、しかしながら今後の研究の発展可能性がまだ十分にあることである。近年、国際的な「言語・ジェンダー研究」は、徐々に性差・ジェンダーをある種のパフォーマンスとして見なすようになり、性差・ジェンダーがいかにインタラクションの中で会話・談話を通して構築されているのかを重要視するようになってきた。それと同時に、言語とジェンダーに関わるアイデンティティがいかに相互作用しているのかという課題に取り組んでいる。こうした類の研究の中では台湾の現象をテーマにしたものがまだ少なく、今後の研究の発展可能性があると考えられる。

本稿でのレビューを通して、台湾のデータが、「言語・ジェンダー研究」という研究分野全体に寄与し得る特殊な側面を見出すことができた。テーマの独創性で言えば、オーストロネシア語族・南島語族の言語に見られるジェンダーの現象も、ネット用語を含む中国語の表記体系

に見られるジェンダー関連の現象も、いずれも欧米圏で行なわれる「言語・ジェンダー研究」で収集されるデータと異なり、「言語・ジェンダー研究」のもう一つの側面を示している。なお、台湾の社会文化も、西洋と異なる社会言語的現象を生み出しており、例えば中国語の「氣質」という言葉に見られるジェンダーと言語との関連も、選挙戦における女性立候補者の言語使用のストラテジーも、いずれも顕著な例である。台湾はその歴史や人口などの特徴から、多言語・多文化の社会に発展してきた。さまざまな言葉や言語現象には常に異なる社会的意義が付与され、ジェンダーのテーマとの関連性が高いため、台湾における多様な言語現象を切り口として行なわれるジェンダー研究は、十分に発展可能性のある研究方向であると言える。以上を総合して、台湾の現象をテーマにした「言語・ジェンダー研究」はまだ今後の展望が大いに期待されると結論づけることができる。よって、この研究分野は言語学者とジェンダー研究者が引き継ぎ力を入れるに値するジャンルである。

原著者による謝辞

資料検索および書誌情報の整理の際に協力していただいたリサーチ・アシスタントの李婉歆氏に感謝の意を表す。

翻訳者による謝辞

まず、翻訳の許可を快諾してくださった蘇席瑤先生に謹んで感謝を申し上げる。また、全編を通して日本語ネイティブチェックをしていただいた斉藤巧弥氏（北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院博士後期課程）にこの場を借りて感謝の意を表す。本稿での訳文・訳注における不備は、すべて翻訳者の責任である。

【注】

- i 本稿は、『師大學報：語言與文學類』（訳注：『台湾師範大学ジャーナル：言語と文学』）57巻1号（Pp.129-149、2012年3月）に掲載された「語言與性別研究：文獻回顧」（英文タイトル：Language and Gender Studies: A Review）を翻訳したものである。中国語原文は下記のウェブサイトで見覧可能である。<http://jntnull.ntnu.edu.tw/jll/PaperCate.aspx?ItemId=170&loc=tw>
- ii 2005年、テキサス大学オースティン校より言語学博士号（Ph.D. in Linguistics）を取得。専門は社会言語学（「言語・ジェンダー研究」、言語人類学（越境・移動する華人コミュニティの研究）。現在、国立台湾師範大学文学部英語学科准教授。Email：hsysu@ntnu.edu.tw
- 1 「言語・ジェンダー研究」は字面通り学際的な研究分野である。広い定義からすると、社会言語学、言語人類学、カルチュラル・スタディーズ、ジェンダー研究、メディア研究などが含まれる。本稿では、言語・言語学的な視点を切り口にしているため、言語の分析に比重が置かれている。
- 2 本稿が文献レビューを「海外における研究」（中国語原文：「國外研究」）と「台湾における研究」（中国語原文：「本土研究」）との二つに分けているのは、「台湾における研究」をある種の国際的な「言語・ジェンダー研究」として位置づけるためではなく、これまでの海外での研究の発展状況を、これからの台湾における研

- 究の発展のための鑑とするためである。また、文献の中で「海外における研究」のうち、欧米の文献が比較的が多いのは、欧米の地域の文献が国際学術界でアクセス数が高いのと、筆者（訳注：原著者）自身が入手可能な文献に限りがあるためである。
- 3 レイコフは、強意語の使用や大げさな口調は、かえって言い方・話し方の力強さを弱めることがあると考えている。
 - 4 本稿で定義する「本土研究」（訳注：「台湾における研究」）とは、台湾社会における言語とジェンダーをテーマにした先行研究のことであり、著者の背景には拘らない（訳注：台湾人著者でなければならないというわけではない）。ところが、この条件をもとに先行研究を分類していくと、以降3.2節で紹介する表記体系における「性別への期待」という部分に関しては研究者によって見解が分かれる恐れがある。本稿での分類法・分類基準は、主に文献の中で、データ収集の方法と場所について述べられているか否か、また、その議論の主題が台湾社会であるか否かである。そのため、Farris (1988) を「本土研究」（訳注：「台湾における研究」）とし、一方、Fan (1996) および Ettner (2002) は含めないこととする。なお、施玉惠 (1984) に関しては、データ収集の場所と台湾社会との関連づけは明確に述べられてはいないものの、著者は台湾人研究者であるのと、台湾の「言語・ジェンダー研究」の初期段階の重要文献でもあるため、「本土研究」（訳注：「台湾における研究」）に含めることとする。
 - 5 施玉惠 (1984) は論文の後半部分でも男性と女性の言語使用の違いについて議論している。文字、文型、話し方、音声など、この部分は本稿の3.1節での議論に近いのでここでは割愛する。
 - 6 「他」（訳注：「彼」）と「她」（訳注：「彼女」）、および「你」（訳注：「(男性の) 君」）と「妳」（訳注：「(女性の) 君」）の区別は、のちに規定された表記法であり、話し言葉では区別されない。

参考文献

- 李壬癸。《汶水方言男性語形衍生的類型》、《中央研究院歷史語言研究所集刊》、54期（1983）：1-18。（訳注：「汶水方言における男性の使用する語彙形式の派生の類型」『中央研究院歷史語言研究所ジャーナル』54巻。）
- 李怡慧。《臺灣高中學生交談風格之性別差異》（碩士論文、輔仁大學語言學研究所、2004）。（訳注：『台湾の高校生の会話スタイルに見られる性差』、輔仁大学大学院言語学研究所2004年度修士学位論文。）
- 林瓊瑤。《大學男女生拒絕語在中文使用上的比較研究》（碩士論文、輔仁大學語言學研究所、1998）。（訳注：『男女大学生による中国語の断り表現の使用の比較研究』輔仁大学大学院言語学研究所1998年度修士学位論文。）
- 施玉惠。《從社會語言學觀點探討中文男女兩性語言的差異》、《教學與研究》、6期（1984）：207-229。（訳注：「社会言語学の観点から見た中国語の男女差」『教学と研究』6巻。）
- 紀韋呈。《國語與閩南語語碼轉換之性別差異：社會語言學研究》（碩士論文、輔仁大學語言學研究所、2008）。（訳注：『国語と閩南語のコード・スイッチングに見られる性差—社会言語学的研究』、輔仁大学大学院言語学研究所2008年度修士学位論文。）
- 陳淑美。《男女言談互動關係：臺灣地區一個 Call-in 廣播節目中言談策略的研究》（碩士論文、國立清華大學語言學系、1996）。（訳注：『男女間の会話のインタラクション—台湾地方で放送される視聴者参加型ラジオ番組を例にした談話ストラテジーの研究』、国立清華大学文学部言語学科1996年度修士学位論文。）
- 彭威鈴。《臺灣網路語言使用上的性別差異—以部落格為例》（碩士論文、輔仁大學語言學研究所、2008）。（訳注：『台湾のインターネットの言語使用に見られる性差—ブログを例に』、輔仁大学大学院言語学研究所2008年度修士学位論文。）
- 劉靜孺。《從社會語言學觀點看男女言談之差異—以臺灣電視談話性節目為例》（碩士論文、國立臺灣師範大學英語學系、2005）。（訳注：『社会言語学の観点から見た談話スタイルの男女差—台湾のテレビトーク番組を例に』、国立台湾師範大学文学部英語学科2005年度修士学位論文。）
- 歐陽君怡。《電腦溝通媒介語言中的性別差異》（碩士論文、國立臺灣師範大學英語學系、2010）。（訳注：『コンピューターを介したコミュニケーションの言語に見られる性差』、国立台湾師範大学文学部英語学科2010年度修士学位論文。）
- 鄭雯璇。《簡訊中的語言性別差異》（碩士論文、輔仁大學跨文化研究所語言學碩士班、2011）。（訳注：『携帯電話

- のショートメッセージに見られる言語と性差』、輔仁大学大学院異文化研究科2011年度修士学位論文。）
- 謝伊琪。《大學生日常對話之性別語用分析》（碩士論文，國立新竹教育大學國民教育研究所，2006）。（訳注：『大學生の日常会話に見られるジェンダーの語用論的分析』、国立新竹教育大学大学院国民教育研究科2006年度修士学位論文。）
- Brown, Penelope. "How and Why are Women More Polite: Some Evidence from a Mayan Community," in *Language and Gender: A Reader*, ed. Jennifer Coates (Oxford: Blackwell, 1998), 81-99.
- Brown, Penelope and Stephen Levinson. *Politeness* (Cambridge: Cambridge University Press, 1987).
- Bucholtz, Mary, ed. *Language and Woman's Place: Text and Commentaries* (New York: Oxford University Press, 2004).
- Cameron, Deborah. "Performing Gender Identity: Young Men's Talk and the Construction of Heterosexual Masculinity," in *Language and Masculinity*, eds. Sally Johnson and Ulrike Hanna Meinhof (Cambridge, MA: Blackwell Publishers, 1998), 47-64.
- Cheshire, Jenny. *Variation in an English Dialect* (Cambridge: Cambridge University Press, 1982).
- Chiang, Wen-Yu and Pei-Shu Tsai. "PICE: Four Strategies for BBS Talk in Taiwan and Their Interaction with Gender Configuration and Topic Orientation," *Language and Linguistics*, 8 (2007) : 417-466.
- Coates, Jennifer. *Women Talk: Conversation between Women Friends* (Oxford: Blackwell, 1996).
- Coates, Jennifer. *Women, Men, and Language: A Sociolinguistic Account of Gender Differences in Language* (London: Pearson Longman, 2004).
- DeFrancisco, Victoria L. "The Sounds of Silence: How Men Silence Women in Marital Relations," in *Language and Gender: A Reader*, ed. Jennifer Coats (Oxford: Blackwell, 1998), 176-184.
- Eckert, Penelope. *Linguistic Variation as Social Practice* (Oxford: Blackwell, 2000).
- Eckert, Penelope. "The Good Woman", in *Language and Woman's Place: Text and Commentaries*, ed. M. Bucholtz (New York: Oxford University Press, 2004), 165-170.
- Eckert, Penelope and Sally McConnell-Ginet. *Language and Gender* (New York: Cambridge University Press, 2003).
- Edwards, John R. "Social Class Differences and the Identification of Sex in Children's Speech," *Journal of Child Language*, 6 (1979): 121-127.
- Eisikovits, Edina. "Sex Differences in Inter-group and Intra-group Interaction among Adolescents," in *Women and Language in Australian and New Zealand Society*, ed. Anne Pauwels (Sydney: Australian Professional Publications, 1987), 45-58.
- Eisikovits, Edina. "Girl-talk/Boy-talk: Sex Differences in Adolescent Speech," in *Language and Gender: A Reader*, ed. Jennifer Coates (Oxford: Blackwell, 1998), 42-54.
- Engle, Marianne. "Language and Play: A Comparative Analysis of Parental Initiatives," in *Language: Social Psychological Perspectives*, eds. Howard Giles, Peter W. Robinson, and Philip Smith (Oxford: Pergamon Press, 1980), 29-34.
- Erickson, Frederick. "The Social Construction of Discourse Coherence in a Family Dinner Table Conversation," in *Conversational Organization and Its Development*, ed. Bruce Dorval (NJ: Ablex, 1990), 207-238.
- Ettner, Charles. "In Chinese, Men and Women are Equal-or-Women and Men are Equal," in *The Linguistic Representation of Women and Men*, eds. Marlies Hellinger and Hadumod Bussmann (Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins, 2002), 29-55.
- Fan, Carol C. "Language, Gender and Chinese Culture," *International Journal of Politics, Culture and Society*, 10.1 (1996): 95-114.
- Farris, Catherine S. "Gender and Grammar in Chinese: With Implications for Language Universals," *Modern China*, 14 (1988): 277-308.
- Farris, Catherine S. "The Gender of Child Discourse: Same-Sex Peer Socialization through Language Use in a Taiwanese Preschool," *Journal of Linguistic Anthropology*, 1 (1991): 198-224.
- Farris, Catherine S. "Cross-sex Peer Conflict and the Discursive Production of Gender in a Chinese Preschool

- in Taiwan," *Journal of Pragmatics*, 32 (2000): 539-568.
- Gal, Susan. "Peasant Men Can't Get Wives: Language Change and Sex Roles in a Bilingual Community," *Language in Society*, 7 (1978): 1-16.
- Goodwin, Marjorie Harness. "Directive-response Speech Sequences in Girls' and Boy's Task Activities," in *Women and Language in Literature and Society*, eds. Sally McConnell-Ginet, Ruth Broker, and Nelly Furman (New York: Praeger, 1980), 157-173.
- Goodwin, Marjorie Harness. *He-said-she-said. Talk as Social Organization among Black Children* (Bloomington: Indiana University Press, 1990).
- Goodwin, Marjorie Harness. "Cooperation and Competition across Girls' Play Activities," in *Language and Gender: A Reader*, ed. J. Coates (Oxford: Blackwell, 1998), 121-146.
- Haas, Adelaide. "Sex-associated Features of Spoken Language by Four-, Eight-, and Twelve-year-old Boys and Girls," in *The 9th World Congress of Sociology, Sweden, August 14-19, 1978*, by Uppsala University.
- Haas, Adelaide. "Male and Female Spoken Language Differences: Stereotypes and Evidence," *Psychological Bulletin* 86 (1979): 616-626.
- Hall, Kira. "Lip Service on the Fantasy Lines," in *Gender Articulated: Language and the Socially Constructed Self*, eds. Kira Hall and Mary Bucholtz (New York: Routledge, 1995), 183-216.
- Holmes, Janet. "Hedging Your Bets and Sitting on the Fence: Some Evidence for Hedges as Support Structures," *Te Reo*, 27 (1984): 42-62.
- Holmes, Janet. "Hedging, Fencing and Other Conversational Gambits: An Analysis of Gender Differences in New Zealand Speech," in *Women and Language in Australian and New Zealand Society*, ed. Anne Pauwels (Sydney: Australian Professional Publications, 1987), 59-79.
- Holmes, Janet. "Paying Compliments: A Sex-preferential Politeness Strategy," *Journal of Pragmatics*, 12 (1988): 445-465.
- Ide, Sachiko. *Onna no kotoba otoko no kotoba (Women's Language, Men's Language)* (Tokyo: Nihon Keizai Tsushinsha, 1979).
- Ide, Sachiko and Naomi Hanaoka McGloin, eds. *Aspect of Japanese Women's Language* (Tokyo: Kuroshio, 1990).
- Jespersen, Otto. *Language: Its Nature, Development and Origin* (London, UK: Allen and Unwin, 1922).
- Kelly, Alison. "Gender Differences in Teacher-pupil Interaction: A Meta-analytic Review," *Research in Education*, 39 (1988): 1-23.
- Kuo, Sai-Hua. "Sociable Arguments among Chinese Friends: Process and Management," *The Tsing Hua Journal of Chinese Studies*, 23 (1993a): 253-285.
- Kuo, Sai-Hua. "Formulaic Opposition Markers in Chinese Conflict Talk," in *Georgetown Round Table on Language and Linguistics*, ed. James Alatis (Washington, DC: Georgetown University Press, 1993b), 388-402.
- Kuo, Sai-Hua. "Gender and Discourse: A Comparative Study of Male-female Differences in Conversational Style," in *Proceedings of NSC Linguistic Research Project Reports, 1996*, by Academia Sinica (Taipei, Taiwan: Institute of History and Philology, Academia Sinica, 1996), 18.1-18.20.
- Kuo, Sai-Hua. "To be a Woman is Extremely Bothering: How Young Chinese Women Talk about Their Predicaments," *The Tsing Hua Journal of Chinese Studies*, 29 (1999): 511-532.
- Kuo, Sai-Hua. "Involvement vs. Detachment: Gender Differences in the Use of Personal Pronouns in Televised Sports in Taiwan," *Discourse Studies*, 5 (2003): 479-494.
- Kuo, Sai-Hua. "A Woman Warrior or a Forgotten Concubine? Verbal Construction of a Feminist Politician in Taiwan," in *Discourse of Cultural China in the Globalizing Age*, ed. Doreen Wu (Hong Kong: Hong Kong University Press, 2008), 53-70.
- Labov, William. *Sociolinguistic Patterns* (Oxford: Blackwell, 1972).
- Lakoff, Robin. "Language and Women's Place," *Language in Society*, 2.1 (1973): 45-80.
- Lakoff, Robin. *Language and Woman's Place* (New York: Harper and Row, 1975).

- Lee, Alison, Nigel Hewlett, and Moray Nairn. "Voice and Gender in Children," in *Language and Gender: Interdisciplinary Perspectives*, ed. Sara Mills (London: Longman, 1995), 194-204.
- Li, Paul Jen-Kuei. "Men's and Women's Speech in Mayrinax," in *Honor of Professor Lin Yu-k'eng on Her Seventieth Birthday*, eds. Paul Jen-Kuei Li, George Yung-Chao Chen, Morris Wei-Hsin Tien, and Frederic Feng-Fu Taso (Taipei: Wen Shin Publishing Co., 1980), 9-17.
- Li, Paul Jen-Kuei. "Male and Female Forms of Speech in the Atayalic Group," *Bulletin of the Institute of History and Philology*, 53 (1982): 265-304.
- Li, Paul Jen-Kuei. "Sex Differences in Speech and Their Origins," *The Continent*, 67 (1983): 40-46.
- Liao, Chao-Chih and Yu-Hwei Lii-Shih. "University Undergraduates' Attitudes on Code-mixing and Sex Stereotypes," *Pragmatics*, 3 (1993): 425-449.
- Macaulay, Ronald K. S. "Variation and Consistency in Glaswegian English," in *Sociolinguistic Patterns in British English*, ed. Peter Trudgill (London: Edward Arnold, 1978), 132-143.
- Maltz, Daniel N. and Ruth A. Borker. "A Cultural Approach to Male-Female Miscommunication," in *Language and Social Identity*, ed. John Gumperz (Cambridge: Cambridge University Press, 1982), 195-216.
- Mills, Sara. *Language and Sexism* (Cambridge: Cambridge University Press, 2008).
- Milroy, Lesley. *Language and Social Networks* (Oxford: Basil Blackwell, 1980).
- Newbrook, Mark. "Sociolinguistic Reflexes of Dialect Interference in West Wirral" (Ph.D. diss., Reading University, 1982).
- Ochs, Elinor and Carolyn Taylor. "The 'Father Knows Best' Dynamic in Dinnertime Narratives," in *Gender Articulated: Language and the Socially Constructed Self*, eds. Kira Hall and Mary Bucholtz (New York: Routledge, 1995), 97-120.
- Okamoto, Shigeko and Janet S. Shibamoto Smith, eds. *Japanese Language, Gender, and Ideology: Cultural Models and Real People* (Oxford: Oxford University Press, 2004).
- Reinoruzu-Akiba, Katsue, ed. *Onna to Nihongo (Women and the Japanese Language)* (Tokyo: Yushindo, 1993).
- Romaine, Suzanne. *The Language of Children and Adolescents: The Acquisition of Communicative Competence* (Oxford: Basil Blackwell, 1984).
- Sachs, Jacqueline, Philip Lieberman, and Donna Erickson. "Anatomical and Cultural Determinants of Male and Female Speech," in *Language Attitudes: Current Trends and Prospects*, eds. Roger Shuy and Ralph Fasold (Washington, DC: Georgetown University Press, 1973), 74-84.
- Shibamoto, Janet Smith. *Japanese Women's Language* (New York: Academic Press, 1985).
- Spender, Dale. *Man Made Language* (London: Routledge, 1980).
- Spender, Dale. "Talking in Class," in *Learning to Lose: Sexism and Education*, eds. Dale Spender and Elizabeth Sarah (London: The Women's Press, 1988), 149-154.
- Su, Hsi-Yao. "What does it Mean to be a Girl with Qizhi?: Refinement, Gender, and Language Ideologies in Contemporary Taiwan," *Journal of Sociolinguistics*, 12 (2008): 334-358.
- Swann, Joan. *Girls, Boys and Language* (Oxford: Blackwell, 1992).
- Swann, Joan. "Talk Control: An Illustration from the Classroom of Problems in Analyzing Male Dominance in Education," in *Language and Gender: A Reader*, ed. Jennifer Coates (Oxford: Blackwell, 1998), 185-196.
- Swann, Joan and David Graddol. "Gender Inequalities in Classroom Talk," *English Education*, 22 (1998): 48-65.
- Talbot, Mary. "Gender Stereotypes: Reproduction and Challenge," in *Handbook of Language and Gender*, eds. Janet Holmes and Miriam Meyerhoff (London: Blackwell, 2005), 468-486.
- Tannen, Deborah. "Gender Differences in Conversational Coherence: Physical Alignment and Topical Cohesion," in *Conversational Organization and Its Development*, ed. Bruce Dorval (NJ: Ablex, 1990), 167-206.
- Tannen, Deborah. *You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation* (London: Virago, 1991).
- Tannen, Deborah. *Gender and Discourse* (New York and Oxford: Oxford University Press, 1994).
- Thorne, Barry. *Gender Play: Girls and Boys in School* (Buckingham: Open University Press, 1993).
- Trudgill, Peter. *The Social Differentiation of English in Norwich* (Cambridge: Cambridge University Press,

- 1974).
- Wang, Hung-Chun. "Language and Ideology: Gender Stereotypes of Female and Male Artists in Taiwanese Tabloids," *Discourse & Society*, 20 (2009): 747-774.
- Wei, Jennifer M. "Gender Differentiation in Political Discourse: A Case Study of the 1996 Taiwan Presidential and Vice-Presidential Election," *Journal of Women and Gender Studies*, 10 (1999): 79-103.
- Wei, Jennifer M. *Virtual Missiles: Metaphors and Allusions in Taiwanese Political Campaigns* (Lanham, MD: Lexington Books, 2001).
- West, Candace. "When the Doctor is a 'Lady': Power, Status and Gender in Physician-patient Encounters," in *Language and Gender: A Reader*, ed. Jennifer Coates (Oxford: Blackwell, 1998), 396-412.
- Woods, Nicola. "Talking Shop: Sex and Status as Determinants of Floor Apportionment in a Work Setting," in *Women in Their Speech Communities*, eds. Jennifer Coates and Deborah Cameron (London: Longman, 1989), 141-157.
- Zimmerman, Don and Candace West. "Sex Roles, Interruptions and Silences in Conversation," in *Language and Sex: Differences and Dominance*, eds. Barrie Thorne and Nancy Henly (MA: Rowley, 1975), 105-129.

(2017年11月9日提出、11月9日受理)

《要旨》

＜翻訳＞

台湾における「言語・ジェンダー研究」
—文献レビューを中心に

蘇 席 瑤 著
林 恒 立 訳

本稿では、「言語・ジェンダー研究」に関する重要文献のレビューを行う。本稿は2部構成であり、まず第1部では、重要論文の紹介を通して、海外において「言語・ジェンダー研究」がどのように発展を遂げてきたのかをまとめ、この研究分野をより全面的かつ体系的に把握する。次に第2部では、台湾の言語とジェンダーに関わる現象をテーマにした先行研究をレビューし、海外の「言語・ジェンダー研究」の概況との比較を行う。これを通して、台湾での現象が持ち得る研究データとしての価値を示唆するとともに、今後の研究の方向性を示し、台湾の言語学者とジェンダー研究者の研究に資することを望んでいる（訳注：台湾に興味・関心を持つ言語学者とジェンダー研究者を含む）。本稿でのレビューを通しての結論は次のことである。台湾のデータ（会話データ・談話資料）を扱った「言語・ジェンダー研究」の数は決して多くなく、また先行研究のテーマは範囲がやや広いとはいえ、今後の研究の発展可能性がまだ十分にある。よって、この研究分野は言語学者とジェンダー研究者が引き続き力を入れるに値するジャンルである。

キーワード：文献レビュー、ジェンダー、言語、台湾